

野鳥、ゲンジボタル、自然に親しめる町

生平学区

OIDAIRA



生平小の
児童が描く 未来の生平



これからも生平小
の伝統の愛鳥活動
を続けてほしい。
(梅本蒼生)

自然豊かで、人
と人との関わり
が良いまの生
平でいてほしい。
(浅井翔)

愛鳥活動がずっ
と続いてほしい。
(畔柳天馬)

緑あふれるもっ
と活気のある
生平になりますよ
うに。(藤井仁悟)

生平がいつまでも
緑あふれる豊かな
学区でいてほしい。
(前原広大)

愛鳥活動を続
けたい。ホタ
ルを残したい。
(鷺山蓮)



いつまでも緑かが
やく生平であって
ほしい。
(河合恵怜)

ずっと自然豊か
な生平であって
ほしい。
(杉田翠紀)

自然や鳥が守られ、
いつまでも親しん
でいてほしい。
(杉山結衣)

「宝物の未来」 生平小学校校長 市川敏彦

「子どもたちは、宝物です」と常々話され、学校教育を全力で支えてくださる学区のみなさま。その温かな愛情の下、健やかに育つ子どもたちの願う未来は、ここに書かれているような明るく輝かしいものに違いない。たとえ困難に遭遇しようとも、知恵と力で素晴らしい生平を作っていくことだろう。最高の宝物である子どもたちに、心からエールを送りたい。

※情報は平成 28 年度のものです。



編集後記

「学区の特色を如何に表現するか？」を念頭におき、学区の「イメージ」を大切にすることを心がけて作成しました。学区の総代 7 人を中心に会議を行い、内容も試行錯誤を繰り返し、努力を重ねて完成いたしました。素人の作る事の難しさと完成した安堵感で委員全員胸が一杯です。

〔作成委員会〕 杉田誠 / 近藤智茂一 / 都筑敏行 / 野村幸男 / 宇津野辰明 / 倉橋洋一 / 青山稔 / 市川敏彦 / 志賀敏子 / 宇都宮森和 / 林昌宏 / 柴田泰文 / 杉田叔信 / 杉田洋一郎 / 松原暁三 / 島田敏治

〔参考資料〕 生平のむかし / 額田郡河合村誌(復刻) 〔協力〕 生平小学校 / 河合中学校

〔表紙写真〕 生平の自然を象徴する野鳥とゲンジボタル、それらを引き継ぐ子どもたちの活動の様子



大正7年まで生平八幡宮の場所にあった生平小学校校舎（大正5年撮影）



生平郷学校の跡地に建つ現在の生平八幡宮



2 火災で焼失後に建てられた河合中学校



戦没者慰霊碑。この場所で地元の平和を願う慰霊祭が年1回行われる



河合中学校（平成8年撮影）



生平小学校（平成26年撮影）

生平学区のなりたち

江戸時代

一八七二年 ■ 明治5

古部町の孝行娘「とら」（↓特集）が岡崎城主より褒美を受ける
生平小学校の前身である額田県生平郷学校が開校
「河合村生平八幡境内」…1

一八九二年 ■ 明治25

額田郡尋常小学生生平学校が移転し、額田郡河合村立生平尋常小学校と改称（生平町字中屋敷）

一九一八年 ■ 大正7

小学校が現在地へ移転（生平町字鷺場）

一九四五年 ■ 昭和20

三河地震発生

一九五五年 ■ 昭和30

額田郡河合村が岡崎市へ合併する

一九六一年 ■ 昭和36

河合中学校が火事で焼失。同年新築…2

一九六六年 ■ 昭和41

伊勢湾台風の影響でマツタケなどキノコ類が不作となる

一九六七年 ■ 昭和42

生平町の大火発生（8軒が全焼）

一九七三年 ■ 昭和48

ゲンジボタルの人工養殖を河合中学校で開始

一九八二年 ■ 昭和57

切越の八面塔（↓特集）が岡崎市文化財に指定される

一九八一年 ■ 昭和56

岡崎ゲンジボタル河合保存会結成

一九八二年 ■ 昭和57

生平小学校が創立100周年を迎える

一九八二年 ■ 昭和57

河合中学校が全国野生生物保護実績発表大会で環境庁長官賞受賞

一九八二年 ■ 昭和57

生平小学校で愛鳥活動始まる（↓特集）

「河合村誌」を復刻出版

一九八五年 ■ 昭和60

生平ふるさとカルタ発行

一九九七年 ■ 平成9

三世代宅地供給事業として住宅地「ちせいの里」を完工

二〇一四年 ■ 平成26

新生平ふるさとカルタ発行

二〇一五年 ■ 平成27

河合中学校がホタル保護・育成活動で愛鳥週間野生生物保護功労者表彰の環境大臣賞を受賞

二〇一五年 ■ 平成27

生平小学校が11年連続で愛知県野生生物保護実績発表大会の県知事賞と全国野生生物保護実績発表大会の林野庁長官賞を受賞

生平学区の歴史、地名、言い伝え、名所などを紹介するカルタ。それまでは手書きしていたものを昭和60年に印刷して発行。初製作から37年ぶりに、現状に合う内容や文章に改訂しました



やま な
⑭ 菜取り
たけのこぜんまい
わらびあり



時期になると親戚を招いたり、八百屋で売るほど採れていたキノコ類。この年から収穫量が約10分の1に激減しました。今もタケノコやワラビなどは数多く自生しており、山菜採りは盛んです



あ
⑮ 降れば
板を外した
学校橋

この学校の近くには板を渡しただけの粗末な橋がありました。住民にとって大切な橋で、愛着を込めて学校橋と名付けられました。今は昭和39年に完成したコンクリート製の橋が架かっています

生平学区の自慢

引き継ぎたい！ ゲンジボタル

昭和41年、河合中学校の古田先生を中心にゲンジボタルの保護・育成活動を開始。翌年、岡崎ゲンジボタル河合保存会を結成し、平成28年に50周年の節目を迎えました。生平の豊かな自然を象徴するゲンジボタル。今後も河合中学校と河合保存会が力を合わせ、さらなる保護・育成の努力を継続していきます。



⑬ たるまう
ふるさとの川
ぼくらのほこり

生平ふるさとカルタ

メジロ採りや根っこほりなどの現代にそぐわない内容もあったため、平成26年に一部改定されたカルタ。今の生平の良さも残したいという思いから、生平小の児童たちが句を考え、絵を描き、2年がかりで作成しました。子どもたちの生平での生活が垣間見え、あたたかな雰囲気伝わってくる手づくりのカルタです。



⑫ るた取り
生平の今
伝えあう

ちづ 地搗き唄（→特集）

建設機械の無い時代には、神社、仏閣、民家の新築や増改築の基礎工事から棟上げまでには多くの人手が必要でした。そこで基礎となる場所に櫓を組んで地固めする際、人々をまとめたり、疲労を回復するためにうたわれたものです。「祝い唄」、「地搗き唄」、「棟木道中唄」、「ずり上げ唄」、「投げ餅唄」などの種類があります。



⑪ ぎやかな
地づき唄あり
秋祭

学区の特色

地域の約9割を占める森林や、男川、乙川などの清流があり、豊かな自然に恵まれた生平学区。茅原沢町・古部町・切越町・生平町・蓬生町の全域と、秦梨町の一部で構成されています。それらの地名が1640年（寛永17）には存在していたことが『河合村誌』に記されており、江戸時代初期には現在の町の基礎が形成されていたようです。

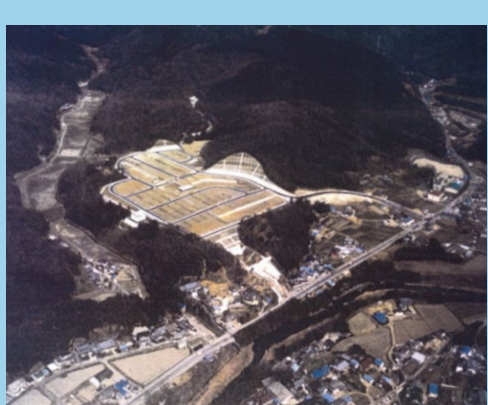
明治時代は江戸時代からの転換期として、領主の統治から民主主義の村政へと移り変わっていきました。大正時代は模範竹林の造成を目的とした額田郡造林組合が設立されるなど、地域の力が強まりました。

昭和に入ると、農業や工業が発達しましたが、次第に戦争の影響が暗い影を落としました。この地域からも多くの人が尊い命を落としており、今も鎮魂の祈りを捧げる式典が行われています。戦後は他の地域と同じく高度成長期の波に乗って、人口が増加し、地域も発展しました。この昭和の時代には、昭和30年に河合中学校校舎全焼、同36年に生平町の大火など、不幸な災害があったことも忘れてはなりません。

平成になると人口減少が顕著になり、過疎化の言葉も聞かれました。しかし、平成9年には「ちせいの里」が造成され、平成28年には新東名高速道路のインターチェンジが近隣にでき、これからの発展が期待される地域のひとつとなっています。

COLUMN ちせいの里

岡崎市が宅地供給の事業として造成した新しい住宅地で、100世帯を擁する「ちせいの里」。隣接する蛍流の森の蛍流公園から石清水が湧出しており、住民らで構成している「ちせいの里 ロックエンゼルの会」により水源と里山の保全活動が行われています。



山地を切り開く大規模な造成工事が行われた

DATA



□人 □ 1,395人
男性 711人
女性 684人

□世帯数 480世帯

□面積 11.11km²

[2016年7月1日現在]

脈々と引き継がれる 生平の心

地域を思う心を育てる

生平小学校の愛鳥活動

◆縦割り探鳥会

隔月に1度、「全校縦割り探鳥会」を行っています。全校を6班に分け、それぞれの縦割り班が観察するコースを年間で決めて実施。この会では高学年の子が低学年の子に野鳥の名前や特徴、観察の仕方などを教えています。



愛鳥会のメンバーから指導を受ける児童たち

見えたよ！



上級生は下級生に丁寧に説明し、愛鳥活動が伝えられていく

地域を学ぶ学校の教育や、地域の祭りの継承など、伝統、民話、史跡を守りながら、大切な心を引き継いでいます。

愛鳥活動



11年連続で県知事賞を受賞している「野生生物保護活動」の一環として行われている活動。「知る活動」、「守る活動」、「広める活動」を設定し、全校縦割り班、学級活動、ふるさとタイムを活用して全校児童で取り組んでいます。

◆野鳥・自然観察(学級活動)

1～3年生は学校で決めた「愛鳥(マスコットバード)」を中心に、昆虫、草花、樹木などを観察、4～6年生は学級で決めた愛鳥活動の追求テーマに基づいた活動や野鳥観察を行っています。

◆ふるさとタイム

地域の自然や野鳥について、学ぶ学習として、どの学級も毎週火曜の1時間目に行っています。



ちづ 地 搦き唄保存会

心をひとつにする伝統を次世代へ

昭和50年10月に生平町民全員で結成した地搦き唄保存会。地搦き唄は新築・増改築の建前の祝典で披露されてきましたが、これらは口承で引き継がれていました。そこで後世まで引き継ぐために文書化が必要と感じた生平町の長老たちにより「文句」がまとめられました。この唄を語り継ぎ、大祭を継承していくことが保存会の役割です。

祭りでは、幟旗などを格納した長持ちを前2人、後ろ1人が1組となって担ぎ、「えい、ほい」の掛け声とともに神社まで独特の練り歩きをします。到着後、神社本殿前では5～6人によって祝い唄が奉納されます。そして地搦き唄に合わせて、櫓の上や下から地搦きを行います。大人も子どもも「力」を合わせ、町民が一つになる良い機会となっています。



親を大切にする心に学ぶ 孝婦とら

江戸時代中期の1690年(元禄3)、現在の岡崎市古部町に農家の一人娘として生まれた、とら。父母をとっても大切にする親孝行の娘として知られています。

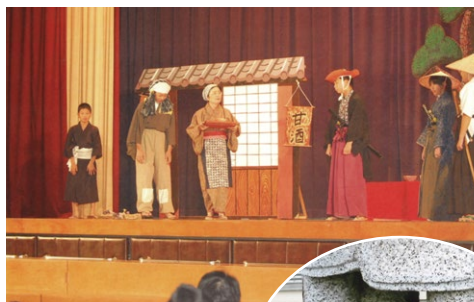
とらの家は大変貧しく、小さい頃から父親と山に入り、岡崎城下にマキを売りに出て生計を立てていました。ところが、父親が病に倒れ、その薬を往復56kmもある現在の知立市まで、1日おきに買いに通いました。そうした日々が続いていたところ、たまたま現在の欠町の茶店で休憩してい



た幕府の役人が、茶店に立ち寄ったとらについて、店の主人から次第を聞きました。とらの孝行にとても感心した役人は、薬代としてお金を与え、江戸に戻り岡崎藩主に伝えました。藩主は自分のことのように喜び、とらに褒美を与え、孝心を称えらるとともに、田畑、山林も買い戻して与え、年貢の諸役も免除したと伝わります。

孝婦とらの 下駄と草履

親思いのとらには、右足に下駄、左足に草履を履いて出掛けたという一風変わったエピソードが残されています。これは出掛ける際に父には草履を勧められ、母には下駄を勧められたことから、両親の気持ちを汲んだ行動と伝えられています。親を大切にすることの素晴らしさを子どもたちに伝えるため、生平小学校の学芸会でも演じられる逸話です。



△学芸会で演じられた孝婦とらの茶店の場面



▷石像も下駄と草履を履いている

先人を敬う心をつなぐ 切越の八面塔

高さ1.5mから1.7m前後、自然石を積み上げて造られている8基の多層塔。細長い石4本を堀り立てて柱とした上に広い板状の石を置いて第一層を築き、ごろた石が数個並べられます。その上にまた板状の石を置くことを繰り返して五層あるいは六層とし、最上に長めの石が相輪に見立てて置かれています。

中世の何らかの祭祀遺跡とも推測されていますが、これといった決め手がなく謎の石塔とされています。



知る人ぞ知る パワースポット!?

三河地震をはじめ、大きな地震の時でも一度も崩れたことがないという八面塔。他に類を見ない奇妙な石積みは、見るからに不安定なため、地元の人も不思議に思っています。また8塔あるはずなのに、どの角度から見ても7塔にしか見えないなど、不思議なことがいっぱい。それゆえ、特別な力が宿っていると信じられており、知る人ぞ知るパワースポットとなっています。



△ほぼ一点で支えており、崩れないのが不思議